

年明けどり業務用キャベツの

生産安定を図り定時定量出荷を実現する技術

1～2月の収穫をねらったキャベツ栽培では、気象による収穫時期や収量の変動が大きく、業務用で重視される定時定量出荷に支障をきたすことが多いです。そこで、滋賀県農業技術振興センターでは、在ほ性が高い品種を用いて収穫可能な状態を長期間維持する技術や、降雨による定植作業の遅延に対応しやすい育苗技術等により、年明けどり業務用キャベツの安定生産・定時定量出荷技術を開発しましたので、その概要を紹介します。

☆ 技術の概要

1. 気象が収穫時期におよぼす影響を小さくするため、早期（8月25日頃）に定植して生育量を確保しておき、その後は在ほ性を利用して収穫を待つ手法を取った場合、品種‘夢ごろも’は、他品種に比べて1月末～2月末の球重や可販率が優れます（図1）。
2. ‘夢ごろも’は、8月24日の定植では12月下旬から3月中旬の間、9月6日の定植では2月下旬から4月上旬の間、収穫が可能です。これら2つの作型を組み合わせると、12月下旬から4月上旬の間、常時収穫可能な状態を維持できます（図2）。
3. 1～2月どりの場合、本ぼ定植後に追肥を通常3回施用し、最終追肥時期を12月上旬頃としていますが、最終追肥時期を10月下旬に早めると収穫時の球重が増加します。
4. 育苗中に追肥を施用せず底面給水により育苗した場合、育苗期間が通常よりも長く50日程度となった苗を定植しても収量への悪影響はありません。

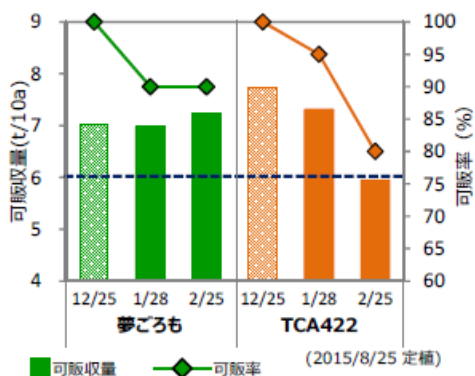


図1 1月末～2月末の可販収量と可販率

期間

可販収量：栽植密度(3800株/10a) × 平均球重 × 可販率

と定義。

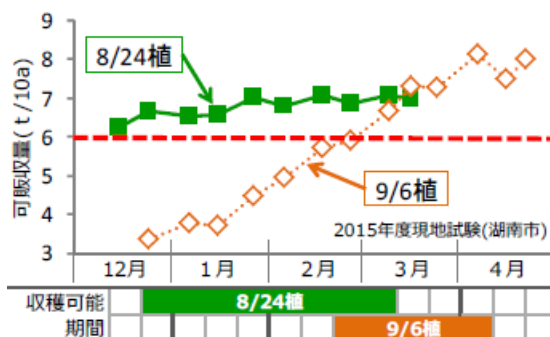


図2 ‘夢ごろも’の可販収量の推移と収穫可能

収穫可能期間：可販収量 6t/10a を超える期間

☆ 活用面での留意点

1. 最終追肥時期を10月下旬に早める場合でも、1回目の追肥(定植2週間後)および2回目(結球始期)は従来通りの時期に施用します。
2. 底面給水育苗(育苗期間中無追肥)であっても、キャベツ苗の定植時期が遅れると収穫時期は遅れます。品種に適した定植時期を逸すると結球しない場合があるので注意します。
3. 詳しいことは滋賀県農業技術振興センター栽培研究部(TEL:0748-46-3083)までお問い合わせください。(日本政策金融公庫農林水産事業本部 テクニカルアドバイザー 吉岡 宏)